表現培う

みんゆう新聞感想文コンクール 最優秀・優秀作品

小学3・4年生の部

◆最優秀賞

「ふつうに生活できるために」

関柴小3年　小関 夏穂さん

せんそう。わたしには、遠い言葉だった。「日本もむかしせんそうをしたことがあるんだって。」位のかんかくだった。でも一学期に喜多方市で行われた『平和のための戦争展』に行って、原子ばくだんの投下やせんし者の多さなどを知り、いやだな、かわいそうだという気もちでいっぱいになった。

夏休みになると、「戦争」や「原ばく」などの記事が多く目につくようになった。読んでも分からないことが多かったけれど、この記事は分かった。せんそうは国と国とのあらそい。わたしはそう思っていた。でもそうではない。国という大きなものではなく、せんそうをささえていたのは、ふつうに生きていた人なのだ。まきこまれていたのは、ふつうに生きていた人なのだ。

人をころすのはいけないことなのに、軍たいにいたら、ころすことを命令される。ふつうに生活していたら考えられないことだ。こわかっただろうと思う。また、ヘビやトカゲを食べるなんて。かわいがっていた馬を食べるなんて。わたしは、ヘビやトカゲを見かけるのも苦手だ。それを口に入れるなんてそうぞうもつかない。そうぞうもつかないことをふつうに生きていた人たちがやっていたんだなと思った。そうしないと生きていけないほど、せんそうはいじょうなせかいなんだとおそろしくなった。

今回の記事で三人の方がせんし者にならず生きのこって、せんそうのことを教えてくれた。この記事を読まなければ、ふつうに生きていた人が、せんそうの時どんなことをやってきたのかが具体的に分からなかった。こわかったけど教えてくれてありがとうと思う。これからも教えてほしい。ふつうに生きているわたしたちがふつうに生活できるために。

◆優秀賞

「会社でも学校でも、昼ね」

桜の聖母学院小3年　佐藤 愛莉さん

いったい何をしているんだろうとこの写真を見た時、とてもふしぎに思いました。ベトナムや台わんの国では、大人になってもこうして昼ねをするのだそうです。日本では、小さな子どもが昼ねをするのは当たり前ですが、学校や会社で昼ねをすることはほとんどありません。わたしはとてもおどろいたし、とってもおもしろいなと思いました。

記事を読むと、ベトナムでなぜ昼ねが習かんになったのかがわかりました。一つは、ベトナムの気こうがとても暑いことが理由です。農業をしている人が多く、太陽がてりつける午後ははたらかずに休むという習かんが大むかしからあったそうです。もう一つは、「昼ねをする子どもは元気にそだつ」という考えがあることも理由だそうです。こうした理由があって昼ねの習かんが生まれたことを知り、なるほどとかん心しました。

また、学校でも昼ねがあり、わたしたちの学校生活とはずいぶんちがうことをはじめて知りました。小学校、中学校、高校のはじまる時間がとても早く、じゅぎょう時間がとても長いそうです。それは、昼休みが二時間もあるからです。長い昼休みにみんな昼ねをするのです。昼ねをすることで、午後からの勉強も集中してできるのが、昼ねを昼休みにする一番の理由かもしれないとわたしは思いました。

わたしは昼ねがあまりすきじゃないし、じゅぎょう時間が長いのはいやなので、日本の学校でよかったなと思います。でも、日本の学校が当たり前と思っていたわたしが、日本いがいの国のことや学校のことを知ることができてとてもおもしろかったです。これからも新聞を読んで、外国のことや外国の学校のことをたくさん知りたいです。

◆優秀賞

「きれいなふじ山にするために」

二本松北小3年　渡辺 和泉さん

夏休みのある日、お母さんの読んでいる新聞をのぞいていたら、「俺、ゴミ拾って一生終わるんじゃない？」という言葉が目にとびこんできました。この言葉を見て、私はどういうことなのかなと思いました。お母さんに聞いてみると、

「登山家の野口健さんたちが、ボランティアでふじ山のお掃除をしてくれているんだよ。」と、教えてくれました。そこで、お母さんといっしょに記事を読んでみることにしました。

記事には、ふじ山の千五百かしょにごみがうまっているということや、それを、すてた人の代わりに片づけてくれている人たちがいるということが書いてありました。

文章といっしょにのっていた写真にもおどろきました。すてられていた、たくさんのタイヤが写っていたからです。千八百本もうまっていた場所もあったそうです。この世の中には悪い人がたくさんいるなぁと思いました。

ふじ山はがっかりしていると思います。せっかく世界文化いさんにとうろくされたのに、ごみがたくさんあるままだったら、取り消されてしまうかもしれないそうです。それから、悲しんでいると思います。自分の体にごみをのせられたら、ぜったい悲しむと思います。

日本のあちこちで、たくさんのごみがすてられています。私もそんなごみを見たことがあります。その場所を大事に思っている人たちも、すてられたごみも、かわいそうだと思います。ごみをすてないで、と言いたいです。

私にはまだ、ふじ山のごみをひろいに行くことはできません。でも、かべ新聞を書いて、友だちにこのことを伝えることはできます。身の回りでできることはやっていきたいです。

近くから見るふじ山もきれいだなぁ、と思える日が来ることを、私もねがっています。

◆優秀賞

「土砂くずれの記事を読んで」

原町二小3年　宮原 知大真君

「南相馬で一時間に百ミリ観測」。雷が光って、大きな雨がボタボタとふった日のことが書いてあった記事です。新聞を読んで、その時の雨が一時間に百ミリになるくらいの強い雨だったということを知りました。

強い雨がたくさんふると、土砂くずれがおきたり、川の水があふれたりします。広島も京都の福知山市も、大雨でたくさんのひ害がでました。土砂くずれでこわれた家の写真。「子どもを助けて」と言うお母さん。けいさつや消防、自えいたいの人たちが、どろだらけになりながら助けている写真を見て、大雨がとてもおそろしいものだったことを知りました。もし、ねている時に土砂くずれがおきたら、にげることなんてできません。川の水があふれて家の中に入ってきたら、どうしたらいいのでしょうか。大雨や台風でひ害が出た記事を読んで、もし同じことがおきたらどうしたらいいのか、ぼくはなやんでしまいました。お父さんに聞いてみると、「この辺は周りに山がないから土砂くずれの心ぱいはしなくていいからね。もし川の水があふれて家まできたら、外にはぜったい出ないで、二階でまっていること。」と話してくれました。

地しんやつなみ、大雨は、自分の家にいる時だけおきるのではありません。新聞には、ゲリラごう雨が去年よりもふえたと書いてありました。新聞を読むと、自然にはいつ起こるかわからない、いろいろなきけんがあることがわかります。だから、公園や友だちの家などにいる時、一人でいる時に「もしも」がきたらどうするかをもっと考えなければいけないと思いました。これからも新聞を読んで、きけんなことは何かを知ったり、ひなんのしかたを家族と話し合ったりして、安全に生活できる方法を考えていこうと思います。

小学5・6年生の部

◆最優秀賞

「『当たり前』の意識を変えよう」

二本松北小6年　渡辺 弥生さん

私は、普段の食事が大好きだ。何品もある温かなおいしい料理。私たちの身の回りには食料があふれている。残され、捨てられていく食べ物達も少なくない。今ではそんな生活が「当たり前」になっている。私も食べ物を残したことは何度かあるが、新聞で戦時中の食に関する連載記事を読み、意識が変わった。

七十年前、桑原清水子さんは小学三年生で埼玉県秩父地方に疎開した。太平洋戦争中、政府が決めた「集団疎開」に参加したのだ。

疎開先での食料事情はとても厳しかった。朝はジャガイモと米を一緒に炊いて小さなお茶わんに一杯、昼は細く短いサツマイモ一本、夜は小麦粉だんごのすいとん。野草も食べたそうだ。びっくりして信じられなかった。ある時特別に配られた「皇后陛下のビスケット」の味は、まるで夢のように感じられたそうだ。

戦争中はこんなにひどい暮らしをしていたんだ、本当に過酷だったのだと思った。これまでにも、戦争について書かれた本を読み、ひどいと感じたことはあった。けれども、身近な存在である「食べること」を通して戦争をみつめるうちに、戦時中のつらさがより私に迫ってくるような気がした。

戦争は、桑原さんのような子ども達をも巻き込み、大変な思いをさせた。だから、桑原さんは最後にこう語っている。

「私たちの世代は子どもを戦争にやらなかった。子の世代も、それを引き継いでほしい」

子どもにひもじい思いをさせ、夢を奪った戦争。今でも世界のあちこちでそれは続いている。きっと、その地域の子ども達もお腹を空かせ、未来を奪われているのだろう。今の生活は当たり前ではない。七十年前を、今世界でつらい目にあっている子ども達を忘れてはいけない。そう心に刻んでいきたいと思う。

◆優秀賞

「希望の星『Tomiokamachi』」

野田小5年　八重樫 佑希君

八月九日、十三日、ぼくは、新聞記事の中に、大好きな星の記事を見つけた。小惑星「Tomiokamachi」ロマ字で書かれた富岡町は、すごくかっこよく思えた。

小惑星に福島県の町の名前が付くなんてすごい。震災で心が折れた福島県民にとって、なんて温かいニュースだろう。ぼくは、わくわくしながら読み進めた。「東日本大震災で被災した地名が小惑星に命名されたのは十五番目」この一行を目にし、びっくりした。もっとほかにも命名されていたのか。ぼくは、すぐにインターネットで調べてみた。すると、「Tohoku（東北）」や「Aizu（会津）」、「Nakadori（中通り）」、「Hamadori（浜通り）」などの地名が小惑星の名として付けられていた。福島なまりで語られている地名が惑星の名として世界の人々に語られているのかと思うと、なんだか不思議な感じがする。各国の人が発音する「Tomiokamachi」をこの耳で聞いてみたい。

福島県民を応援する人々の心が胸にしみる。今回、この惑星を発見し、命名してくれた滋賀県多賀町の天究館の皆さん。富岡町の子どもたちに元気を与えたいと平成四年に自分たちが発見した惑星に「Tomiokamachi」の名を付けてくれた。この惑星は、17等級程度で、肉眼はもちろん、大きな望遠鏡でも見るのは難しいという。しかし、自分たちの大切な大切な故郷がはるか彼方宇宙の惑星の名として輝き始めたというこのニュースは、多くの町民に感動を与えたと思う。これから先、もっとつらいこと、さみしいことに出合うかもしれない。そんな時、夜空を見てこの惑星のことを思い出し、勇気と希望をもつ人がいるはずだ。「Tomiokamachi」は、ぼくたちの希望のシンボルである。

◆優秀賞

「『チーム富岡』から学んだこと」

泉北小5年　白土 愛理さん

「日本一だって、すごいね。」お母さんはそう言ってこの記事を見せてくれた。「大会史上初となる男女ダブル優勝という快挙を成しとげた富岡」と、書いてあった。

「日本一かあ。すごいなあ。」何か一つのことで、クラスで一番になるのも大変だし、学校で一番になるのは、もっとむずかしいことだ。

私は現在バドミントンクラブに入っている。初めてバドミントンをした時は、なかなかラケットにシャトルが当たらなかった。やっと当たる様になったが、ラリーが続かない。簡単そうに見えるけど、結構むずかしい。選手達は想像以上にたくさんの練習をしたことだろう。

東日本大しん災から三年以上が過ぎた。私達の生活は以前の様にもどりつつあるが、まだ、しん災のえいきょうを受けている人もたくさんいる。私の住んでいる町にも、仮設住宅がある。そこに住んでいる人達は、津波などで家を失くしたり、家があっても原発事故の問題で、もどることが出来ずに、今も不便な生活を送っている。「チーム富岡」は、そういう人達や県民に感動と勇気を伝えた。

私は、「きせき」ではなく、日々練習をがんばったからこそ、そして、たくさんの人達の支えや応えんがあったからこそ優勝できたのだと思う。

一しょにこの記事を読んだお母さんは、「一番になることもすごい事だけど、もっと大切なのは目標を立ててがんばることだよ。」と、言った。私はこの言葉がとても心に残った。

林主将は、「これまで支えてきてくれた人に、結果で恩返ししたい。」と、話していた。私も感謝の気持ちを忘れずに、目標に向かってがんばれる人になりたい。

◆優秀賞

「私の役目」

桜の聖母学院小6年　豊岡 桃香さん

あの第一原発の事故から、もう三年以上の月日が経ちました。けれども私のおじいちゃんとおばあちゃんは、今だに飯舘村に帰ることができていません。除染はいったい、いつ、終わるのでしょうか。

新聞の記事では、渡辺輸業自動車整備工場社長の渡辺さんが、「村民が戻らないと仕事にならない。とにかく除染が遅い。」と話していました。除染の進み具合が遅く、帰還の見通しが立たないのが今の現状です。

私のおばあちゃんも、飯舘に行く度、

「草ぼうぼうの田んぼを見ると、がっかりする。」

と、ため息をつきます。田んぼや畑は荒れ放題。私もあの光景を見ると悲しい気持ちでいっぱいになります。原発事故前の飯舘村の風景は、まぼろしになってしまいそうです。私も震災前までは、よく飯舘村に遊びに行っていました。でもそれは、一年生の時までです。おばあちゃんと畑や田んぼに行った記憶。忘れてはいけない記憶だけど、うすれてきてしまいそうです。

私の宝物入れには、小さな袋に入ったお米があります。それは、おばあちゃんの家でとれた震災前の最後のお米です。最後のお米を見ると、飯舘村の楽しかった思い出やどかな風景が目の前に広がってきます。

除染が進まない今、戻らないことを決意した人も多いとおばあちゃんから聞きました。このままだと飯舘村は、どうなってしまうのだろう。正直言って、今の私にできる事はないかもしれません。でも、以前の飯舘村の姿を私は覚えています。忘れずにいること、そして伝えること、それが私の役目だと今は思います。